

日本海に遊ぶ

京都大学水産実験所職員
上野 正博

危険な豹柄

まれた子タコが夏からいいヒョウモンダコで秋にごくまれに見つかすが、手に取るのとは程度。私も実物を見ても危険。カラストンるのは初めてです。こびと呼ばれるくちばしのタコは何か頑張っている唾液腺には猛毒で冬を過ごしてきたのテトロドトキシンが、

に豹柄が光るので、他のヨウモンダコは足の先を全部食われていたし、南の海で暮らすタコなので、舞鶴あたりの魚には毒があるとは分らないようにして下さうか。それとも、派手な色は相手をびつくりさせるため、その隙に岩陰にスタコラ逃げ込むはずが、寒さで動きが遅くなって逃げられなかったのでしょうか。

3月のある日、漁師さんがワカメにヒョウモンダコがついてたと実験所に届けて下さいました。かなり傷ついて弱ってましたが、手を近づけると興奮して、名前の由来となった鮮やかな青い豹(ひょう)柄がネオンのように現れます。

ですが、寒さに弱ったテトロドトキシンはフグ毒なので、噛まれるとフグ中毒と同様、呼吸困難、言語障害などが起こり最悪の場合には死に至ります。でも、とにかく派手な色彩を持つことが多く、敵に対して毒の攻撃を避けるのだと考えられています。何か変です。今回捕まったヒョウモンダコは、派手な色は毒を持つためか、相手をびつくりさせるためか。まあどっちでもエエと言えど、どっちでもエエことなのですが、その辺にこだわるのが科学の第一歩。とは言ってもヒョウモンダコの実験を舞鶴でできるわけもないし、沖繩にいる教え子たちをけしかけてみましょう。

ヒョウモンダコは熱帯に広く分布し、黒潮の洗う紀伊半島や伊豆半島では鮮やかな豹柄がダイバーたちの人気の的。でも、日本海の冬の寒さは乗り切れないらしく、その年に生



舞鶴湾でとれたヒョウモンダコ